
箱入り息子！？

汐凧 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱入り息子！？

【Nコード】

N8932E

【作者名】

汐風 湊

【あらすじ】

舞台は田舎町のリルラ。そこに暮らす、アリスが何も考えずに開けてしまった、箱から穏やかな生活に亀裂が入ってしまった。人生が変わったアリスはどうなるのだろうか！？

プロローグ

「ぎゃあああああ〜〜生首いいいいいい〜〜〜〜〜！！！！！！！！」

あの箱さえ開けていなければ・・・。

何も知らずに箱を開けてしまったアリスは、これ異常ないつてほどに後悔した。

「人生やり直せるならいつがいいか」と聞かれたら、「箱を開ける前!」、と考える暇もなく即答できるほどに。。。

絶叫していたのは、この話の主人公。花屋じつかに勤める18歳のアリス・ローズである。

2

アリスは、王都から遠く離れた田舎街のリルラに生まれた。リルラは、小さい街ではあるが、緑は多く、穏やかな時間しんかんが流れている。

そして、皆が家族のように親しく、助け合いながら日々の生活をしている場所だ。

アリスの実家は、町の外れにひっそりと建つ、一軒家で三人暮らしだ。

広い敷地内で、丹精込めて栽培した花を販売する

”Wonder Land”

という名前のお店でもある。

また、花だけではなく、アリスの趣味で作った、紅茶や焼き菓子なども人気であった。

そして、アリス本人はというと、父親から受け継いでいる美形で、さばさばしたところもあるが面倒見がいいという性格から、街の皆にも愛されている少女である。

この物語は、毎日ラブラブな両親に中^あてられながら、その環境で育った、しっかり者の主人公が、穏やかな田舎にある”Wonder Land”を舞台に繰りひろげられた、ホラーではなく、ドタバタコメディである。

プロローグ（後書き）

長編に挑戦です

至らない点が多いと思いますが、付き合って頂けたら嬉しいです
^

第1話

今日は、アリスは家でのんびりと過ごしていた。

普段のアリスの仕事である接客は、花の収穫も配達も終わっているため、鴛鴦おしどりローズ夫妻が仲良く会話しながら、店の方に出ていたからだ。

正確には、逃げてきたというほうが正しいかもしれない。

今日も何百回も聞かされてきた母のエメラルドが父アレキサンドに一目惚れした瞬間の馴れ初めを、また、どれだけ父親がかっこいいかを飽きもせずアリスに聞かせようとしていたからである。

これを語らせると、1時間半はその場から動けなくなる。上に、仕事どころではなくなるのだ。

幾度となく、その目にあってきたアリスは、そこから逃げる術を学ぶようになった。

そして、今回もどうにか説き伏せて、家に帰ってきたのである。

「新作ケーキでも開発しようかなあ。。。。」

アリスは、キッチンで必要な器具や材料を台の上にズラッと並べた。そして、ケーキに入れる花を選ぼうと思いい、温室へ行くことにした。

温室に向かおうと勝手口を引き開けると、開けているはずの視界を阻むものがあった。

勢いあまって、強打する寸前でどうにか止まったアリスは、その重いなにかを少し押しして、どうにか外に出た。それは大きめの縦長の四角い箱だった。

160cmあるアリスの肩くらいの高さで、幅は1メートル・・・は、いかにないくらいだった。

とりあえず、ずっしりと重いものを10分ぐらいかけて家の中に押し込んだ。

そして、上の蓋のようなものを持ち上げて、中を覗き込むと

・・・赤い薔薇ひばに囲まれた頭があった

「ぎゃあああああああ~~~~生首いいいいいい~~~~!!
!!~~~~うっ~~~~げほっ」

叫びながら、箱から距離をとろうと後退したアリスは、キッチン台に思いつきり腰を打ち付けて、あまりの痛さに膝をつき、唸うなった。と同時に、台の上に並べられていた材料などが、ドカドカと派手に床に落ち、アリスには見事に小麦粉の袋がクリーンヒット。

すると突然、

「なにごと!?!」

と青い目をパツチリと大きく開けた、さきほどの生首と繋がっている胴体がガバアツと登場して、花が舞い落ちた。

そして、目の前の真っ白なアリスを見て、目を見開いた。

アリスはというと、みすばらしい全身真っ白の自分の状態を忘れ、

クセのある髪と青い目が印象的で、今まで見たことの無いほど整っている中性的な顔を目の当たりにし、無遠慮に凝視していたアリスは、若者の大きく見開かれた長い睫毛が上下に動くことで、ようやく意識を取り戻し、エプロンで顔を拭きながら訊ねた

「……ええつと~~~~どちら様ですか????」

すると、その人物は、

「この家のおばあさんですね!!!私をこの家の息子にしてください!!!!!!!」
と言いつつ放ったのだった。

第1話（後書き）

まだ、1月に考えていた内容を修正して投稿している段階です；；

これが3話目から無くなって、投稿続けられるか自信が・・・；

^^^

投稿し続けてる方は、改めてすごいと思いました！！

第2話

おばさんと勘違いされたことか、アリスの言葉がスルーされたことか、

どちらを先に言うべきか一瞬迷い、口を開き言葉を紡ごうとすると、

「いいわよ」

「いいよ」

両親の揃った声がじゃまして、部屋に響いた。

「いつの間に！？・・・というか、私みたいにその前に発する言葉があるはずでしょ？？」

今度は即座に反応したアリス。

アリスの様子をみて、目を見合わせた両親が、無視する事にしたのか、再びその若い男を捕らえ、箱から完全に出てくるように促し、すらりと伸びた足やら体やらを眺め、

「顔よし！スタイルよし！！息子に決定！！！！！」

とエリザベスが言った。しかも、右手で親指を立てた”グッドサイン”付きで。

エレキサンドもうんうんと頷く始末。

「何でそうなるの！！！！！！！！！！」

「だって……あ！兄弟欲しいって言ってたじゃない？」

「……今思い出したでしょ？」

「でも美人で、顔もいいし、背も高いし。。。」

「二人ともホント美人に弱いんだから。」

「もって生まれた美人は貴重なのよ！！お父さんも美形だけど」

「あ~~~~ハイハイ。その前にどこの誰かも分からないのに、簡単に家に入れていいの??」

「でも、“美人に悪い人はいない”って言うじゃない？」

「……聞いた事ないよ」

「だって今お母さんが考えたんだから!!」

「~~~~~!!!胸張っていうこと!?!だからその前に

」

男連中を放って置いて、アリスとエメラルドが言い合った。

アリスが頼れる、すっかりした娘に育った所以である。

……突っ込み専門というべきだろうか？

言い合いが収まり、いつの間にか日も落ちたため、とりあえず、「腹が減っては戦は出来ぬ（もちろんエリザベス論）」ということで、リビングでディナーをとった。

両親の仕事のため、今は食事をアリスが作っている。

テキパキと短時間で料理を作り、4人で食卓を囲んだ。

「まずは素性を明かしてもらわないとね」

綺麗になくなった皿をさげ、食後のお茶を並べて、アリスは横に座る男性に話しかけた。

無駄の無い動きで一口お茶を飲んだ後、若者は話し始めた。

名前はミカエルといい、20歳であること。

それ以外は、ここは和む場所だとか、両親は似合いのカップルだとか言っつて、答えようとはせずに、行くところがないというところを強調した。

まさに突っ込み所満載の返答に、どうにかそれを抑えつつ話を聞いていたアリスは、両親、特に母からの「いい子じゃないの!!!」という眼差しをビシビシと受け、
「”居候”としてならいいんじゃない・・・?」
としげしげ答えたのだった。

結局、アリスも、御人好おひとよしなのである。

第2話（後書き）

ところどころ言い回しがおかしいですね；

でも、今のところこれが精一杯です（+ | +）

そのうち書き直します！！！

第3話（前書き）

第3話

話し合いの結果、ミカエルの部屋は2階のアリスの部屋の隣に決まった。

階段をのぼり、すぐがアリスの部屋で、奥に行くにつれて、ミカエル、両親の寝室というならびになった。ミカエルの部屋は、元客室で、ある程度の家具は揃っていたため、そのまま過ごしても不便は無い。

「ここがミカエルの部屋ね」

「ありがとうございます」

「いえいえ〜」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい〜」

全面的にアリスが部屋の説明や何やらを引き受け、部屋まで案内した。

自分の部屋に戻り、アリスは盛大なため息をついた。

明日からは、ミカエルも花屋の仕事を手伝う事となったのだ。

わけの分からない美形の居候との生活は全く予想できず、何も起こらない事を祈るばかりだった。

花屋の仕事は割と忙しい。

自らが栽培までしているため、水遣りや土の状態の管理などの花の世話から、収穫。花を使ったポップリやお菓子などの製造（これはほとんど趣味だが）、店での接客、花束の配達など。。。。毎日この全てををこなすわけではないが、毎日やることが変わるの
で、大変である。

「・・・ということ、アリスちゃん。ミカエル君のことよろしくね」

「どういうことで!？」

「まあまあ。年も近いんだし。仕事の事は全部アリスちゃんが教えてくれるから」

「わかりました。僕も早く仕事を覚えるように努力します。アリスさん、宜しくおねがいします」

朝食の最中に、ニコニコしながらエメラルドが言い出したかと思えば、ミカエルも笑顔を湛えて、礼儀正しく言った。アリスは何も言えなくなり、黙って食事を終えたのだった。

両親がお店の方に向かい、アリスとミカエルの二人が残された。

「とりあえず、温室案内するよ」

「はい!!--!」

透き通った目をキラキラさせてアリスの後に続く、ミカエルはまる

で主人の一挙一動についていく子犬のようである。その割りに、子供っぽいものではなく、爽やかなにっこりという効果音がついてきそうな笑顔付だと、悪い気はしない。

温室は前面ガラス張りで、天辺はとがっている角錐のような形になっていて、どこに太陽があっても、日光がいきわたるようになってる。

その一角には、テーブルと椅子を置き、休憩できるところも作ってある。

そこでゆったりお茶を飲むのが、アリスのお気に入りだった。

そこまでの道のりは、遠いわけでもないが、近いわけでもなく、白い、草を絡ませたアーチをくぐって、少し上り坂になっている開けた道を真っ直ぐ進まなければならない。

勝手口から裏庭へ出て、とぼとぼと歩く。

アリスが後ろを歩くエリックを見ると、珍しいのか、周りをキョロキョロ見渡しながらついてくる。

温室では様々な色が溢れていた。

それも、朝日を浴び、季節も時間も問わず、自分を主張していた。

そして、これまたスポットライトを浴びたすらりとした白猫が一匹。

「バン、おはよう」

アリスの声に答えるように猫はこちらを向き、尻尾を一振りした。

「バンって猫の名前ですか??」

「そう。家じゃなくて、主にこの温室にいるし、花の番猫(?)だから、”バン”」

「……」

その名前はどうかと思うけれど、あえて何も言わない。

「この花は知ってるだろうけど、バラね。赤に白に黄色にピンク。色々な色があるけど、それぞれ花言葉が違っんだよ」

アリスは、花のことになると、途端に機嫌がよくなって、舌を回らせる。

温室を一回りし、それぞれの花に声をかけては、水をやったり、雑草を抜いたり。

と世話を焼きながら、昨日では考えられないほどの溢れすぎた笑顔である。

「ひとまず、朝の仕事は終わったから、休憩〜」

軽くスキップしながらも温室の一角に進むアリスを追いながら、

「あいつ、おもしろ〜〜!」

小さい声で肩を震わせながら、ニヤリと笑った。

その二人の後からついてきていた、白猫のバンは男の変わりように、主人の今後を案じて、悩ましげに鳴いた。

第3話（後書き）

大分更新が遅れてしまいました；；

すみませんm(____)m

3話まで投稿しましたが、まだまだ勉強不足で、思うように書くことができていません。

そのため、また投稿期間があいてしまうことや、書き直しをする場合があります。

ご了承下さい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932e/>

箱入り息子！？

2011年1月28日02時29分発行